

久能山東照宮の衣服の遺品について、(第6報)

—— 徳川家伝来の着籠 ——

福島大教育

栗原澄子。

目的、安土桃山時代から江戸時代の武家衣服には、どのような種類のものがあつたか、それは、どのような形態・縫製方法であつたかを探る。

方法、久能山東照宮博物館に收藏されている『宝物目録』名では「着籠^{きじゆ}」とされている遺品類9点を対象とした実態調査である。

結果、着籠9点のうち、上衣は3点、下衣は2点、籠手2点、膝当1点、鉢巻の1点がある。表裂に同一裂地を使つたものもあるので、それらは一揃として着用したのかも知れぬが、明らかでない。裂地は、麻・平絹・紬・緞子・文綾・錦など、豪華な裂や皮なども使用しているが、どれも表裂と裏裂の間に鎖が入れているものである。鎖は、今日の晒木綿のような裂に所どころとめつけられているので、仕立の関係から外回りはすべて玉縁巻でしまつされたあと、更に玉縁の部分打ち紐でからげ合わせて形づけられている。今回報告する着籠は使用されなかつたとみられるが、いずれも戦場で着用する衣服と考えられる。

仕立は前回の具足下と同様に、鎖師の手によるものと考えられる。